



聖域

私の聖域は
彼の傘の下
他の誰も誰も入れない

それまでの私といえば
カワイソウな女の子
周りの人目ばかり気にしてた

昼休みの時間になって
梅雨前線がシエスタしてた
彼が「傘にいでてあげる」って言ったんだ
自意識過剰な私は
だいぶ抵抗したけど
散歩に行きたかった
自由になりたかった
現実を忘れたかった

それからそこが
私だけの聖域になった

聖域を持ち上げて
天の天まで届くように
くるくるまわるその青の下で
初めてのキスをした

あなたが私の頬にさわる
花をめぐるように
そういうゲームが好きだった

遊び疲れて帰る車の中
あなたは「結婚しよう」って言ったんだ
赤信号が水滴にかわる

あいまいに返事した
そのころの私は若すぎた
ケッコンなんて
ショウライなんて
何も考えられなくて

森に迷いこんだ傘の下
あなたは「傘が邪魔だね」って言ったんだ

聖域を持ち上げて
天の天まで届くように
くるくるまわるその青の下で
初めてのキスをした

雨とドーナツ

土砂降りの日 傘もささずに
歩いて帰るのが好きだった
ドーナツを駅で10個買って
いつもの電車に乗って
見慣れた無人駅で下りた

傘をささないほど素敵な冒険が
思いつかなくて
この窮屈なマイナンバーの世界から
逃げてしまいたくて

雨 汚れた雨が
激しくドーナツの袋を叩く
必死で袋を抱きかかえた
雨で前が見えなくてもそれでよかった
制服は雨の匂い
ドーナツは甘い匂い
どこかで雷が鳴っていた
大丈夫 私には落ちない

もうちょっとひといきで
家に辿り着く
またきっと叱られるかなあ

制服は雨臭くて
ずぶ濡れで
車が通るたび泥まみれで

雨 汚れた雨
土砂降りが激しくなる
息もできない
そういう瞬間に
救われていたんだなあ

雨 汚れた雨
すべてを洗い流して
ただドーナツの上には降らないで
みんなで夜に食べるんだ
甘いもの好きな家族だから

家が見えてきた
身体中が冷たさでガタガタ震えてる
親になんて言われるかなあ

土砂降りの雨の中を
大好きな夏の歌 口ずさみ歩く
翼が生えたような気がした
やっと自由になった気がしたんだ

雨 汚れた雨
すべてを洗い流して
ただドーナツの上には降らないで
泥まみれのエスケープ

叱られたあとで
守りきったドーナツ
みんな喜んでくれるかなあ
明日着る服がどうか
言われるんだろあ
ドーナツを食べながら

白のスパークリング

高校に入って はじめてのボーイフレンドができた

話しかけても聞いていなくて 黙々と弁当食べるような

とりあえず知らない人だから 丁寧っぽく話しかけてた

でもいつも彼は目を合わさず弁当を食べていた

班が一緒だったから 一緒に掃除をした

でも彼はなかなか心を開いてくれなかった

話題をいろいろもってきて 笑わせようとした

でも彼はニコリともしなかった

気付けば 桜が散って

学校の緑が揺れていた

いつも同じベンチに座ってた

なんとなくで時間が過ぎてった

不思議だな

いつしか君がかわいくてたまらなくなるなんて

もっと近くでその悪ガキみたいな笑顔見ていたくて

真っ黒な髪の毛の奥をのぞきこんだ

イケメンでもないけど 世界一かわいいひとだと思った

他人にはほんとに他人行儀だし ろくに目を合わせない

目を開けていても扉が閉まっててカギがかけてあるような

でも私には嬉しそうに話すんだ ろくでもない替え歌や

昨日読んだマンガのこと

イケメンでもないけど 世界一かわいいひとだと思った

笑顔を見たら 秒針もその刻む音も止まってしまった

教室の真昼の光が 白のスパークリングのように輝いた

君が誰かをイジってる笑顔を遠くからじっと見ていた

あれから もう十年が経ち 次々と新しい建物ができて

あのころの高校前の景色は もう残っていない

不思議だな

何年前に撮った写真だろう？わからないけど

小さな額縁に入った若い二人の写真が部屋に飾ってある

永遠なんて 太陽や宇宙が滅んでも生き続ける事だよ

その日まで空は二人を覚えていてくれるかなあ

真夜中中毒

窓に頭をつけて

昨日の事を

考えるだけで

心がはずむ

もう少し

このままにして

なにかも持っていけ

思い出もいらいちもみんな

窓を開けたらもう

真夜中しか見えない

真夜中しか見えない

誰もこないで

ひとりにして

流れる時間が

痛すぎる

宇宙のホクロを

見上げてた

カーテンが誘うほど

眠れない

窓を開けたらもう

真夜中しか見えない

真夜中しか見えない

真夜中に抱かれて

そっと目を閉じて

この身を空に預けたら

楽になれるかな

真夜中に落ちていくんだ
心のままに
あたし人形みたい
喋れない

紙くずを捨てた
ただの紙飛行機
真夜中の風が 頬を撫でる
いつも寝ている
真夜中にだけ目覚める
生温い熱に 吹かれてる

なにもかも持っていけ
悲しみもささやきもみんな

窓を開けたらもう
真夜中しか見えない
真夜中しか見えない
真夜中しか見えない

コーヒー

ちょっとしたことで
傷つけてしまうことがある
どちらも悪くないのに
目をあわせなかつたり

「ごめんね」なんて
素直に言えたらいいのに

熱いコーヒーを入れて
二人分はこんでいく
これで今日はそんなに
悪い思い出でもなくなるかな

ペンでぐちゃぐちゃにして消したい
ひどいこと言ってしまった
でもね
君は許してくれると信じてる
カフェインが体に悪いとか
コーヒーは一日三杯までだとか
どうでもいいじゃない

消しゴムでまっ白にしたい
文句もたくさんぶちまけた
でもね
君を信じてるから言えたんだ
四杯目のコーヒーでも
一緒にあたたまろう
さっきのことは忘れてさ

ねえ
もっと話したい
誤解したこと ありすぎる
コーヒーのホカホカの湯気が
虚しくみえる
もっとそばにいたい

君のこと全然わかってなかったの
このコーヒー一杯で
仲直りできますように

ねえ
もっと話したい
となりにいたつもりだった
心はとなりにいなかったんだなあ
ごめんね

ONE AND ONLY

心からあなたの事を好きになったんだ...

お湯も水もない露天風呂で凍えてる夢を3度見たんだ
さすがに眠れなくなって夜中2時半に起きてしまった
残念な頭で考えてるとどんどんネガティブになるんだ
迷惑千万な事に真夜中「死にたい」ってメールを送りまくった

すぐに握りしめてたスマホが鳴って
私はすべてを悟ったんだ
ヤバいどうしよ嫌われるんじゃないかって
ドキドキしてたけどもう遅かった

「ごめんね、今こんな時間だから」

「そういうこと人に言わないほうがいいよ」

そのときは本気だったのに
ああ
そうだったんだ
そうだったんだ...

バカみたいだけど本気だった
結局よけいに寝れなくなった
スマホの電源をつけてまた消して
意味のない事繰り返してた

ああ
そうだったんだ...

あの人たちは私が
野垂れ死にしようが丸焼きになろうが
友達のふりをしてどうでもええんやな
友達って何？

誓い？約束？趣味？就職？それとも・・・

電源をつけてまた消して
アホみたいに何十回やっていた
その無駄で意味のない行動に
遅れてきたメールが答えをくれた

「死なないし死にたくないです」

残念な頭じゃ意味がわからなくて
情けないことにこう聞いたんだ
「あなたが死にたいかって聞いたんじゃないんだよ」って
あなたはこう答えた
「君は死なないし
死にたくないから
生きたいからこんなメール送ってきたんでしょ？」って

ああ
そうだったんだ
そうだったんだ...

心からあなたの事を好きになった
心からあなたの事を好きになったんだ
心からあなたの事を好きになった
心からあなたの事を好きになったんだ

心からあなたの事を好きになったんだ...

ロナセン嬢

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
そうやってあなたが呼ぶからさ
今日は寝ボケてたな、と思いつつ
飲み水の準備をする

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
食器棚をあけておはようを言う
「だいじょうぶ、これで元気になれる」
って私はあなたの呪文にかかる

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
いつでもどこでもそう呼ばれるの
あなたがいるから私がある
そうなんだけどね

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
だけど私はお嬢様のままでいたくないの
だからごめんね
これからは人前で呼ばないで

名前と呼んで！

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
あなたが私の中に
入りこんでくる感覚が好きだった
機械文明の優しさを感じた

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
あなたがおやすみの呪文をくれるから
よく眠れるようになったよ
楽しい日々にも終わりが来るのかな？

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
今思えば昔はそれでよかった
あなたと毎日を大切に過ごしてた
でもねもうできなくなったの

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
あなたが好きだったのに
あなたのせいで私はいつまでも
孤独な箱入りお嬢様のまま

あなたの呪文は強すぎて
私の舌は動かなくなった
あなたに手をのぼしかけてやめた
『このままじゃ ダメなんだ』

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
その呼び方はもうやめてくれる？
もう今日の朝でお別れだよ
いきなりでごめんね

「ロナセン嬢、ロナセン嬢」
私はあなたのお嬢様じゃない！
一人の大人として生きるために
新しい出逢いを探すよ

名前と呼んで！

幻の歌

昔レンタルショップへ行ったら
幻のような歌がかかっていた
思わず立ち止まって聴いた
幻の歌

大きな蝶が羽根を広げ優雅に飛ぶような
声の女性歌手で
英語で何か伝えようとしてた
何も聞き取れなかったけど

たった数十秒
その歌を聴いていた
その歌にどんなに癒されただろう
歌手の名前も曲名もわからない
その歌は
今だに僕の胸の中で
思い出すたびきらめくんだ
サビしかわからない
言葉もわからない僕の青春
幻の歌

洋楽を聴くようになり
僕はその歌をさがし続けた
でも歌手名も歌詞もわからない

あれから5年にもなり
その歌は消えていった
店にもかからなくなった

たった数十秒
その歌を聴いただけで
ちがう景色に立っている気がした
風はピンク色
空はラベンダー

見たことがなくて懐かしい場所
その歌は
今も僕の胸の中にあり
切ないとききらめくんだ
子守唄のくれる涙を流すんだ
サビしかわからない
言葉もわからない
5年も過ぎた今でも 心の中踊り続ける
幻の歌

誕生日メールをあと60回、あなたへ

メールの文化はいつまであるんだと思う？
私の子供の頃にはケータイさえなかったよ
私がおばあちゃんになったとき スマホはあるのかな？
何で連絡をとるんだろうね？

でも伝えたい
あなたは私の大事な人
死ぬ時にも きっと逢えないけど...

あと何度 逢えるんだと思う？
あなたには旦那さんがあって そのうち子供もできて
仕事があって 家事に追われて 休みの日は家族旅行で
じゃあきつとわずかだね

せめて あなたの誕生日に
メールを送ってもいいですか？
一年に一度だけだから
邪魔になりたくないの
邪魔なら言ってよ
もう二度と連絡しないからさ
逆ギレとかじゃなく
あなたのこれからは大事にして

でも伝えたい
あなたは私の大事な人
死ぬ時にも きっと逢えないけど・・・
夜空を見上げて
明日もあなたにいいことがありますようにって
星に祈るんだ

伝えたい
私がおばあちゃんになっても

文字が読めなくなっても 認知症になっても 手が震えても
スマホがなくなっても パソコンがなくなっても 寝たきりになっても
大事な人
約束だよ？
誕生日メールをあと60回、あなたへ・・・

美しい名前

子供のころなんとなく
母の部屋に入って
もうずいぶんと古そうな
名前の字画数の本を見つけた
開いたらなんと
私の名前の字画数を計算した
跡があった

どこをとっても最悪の人生
孤独で 財産を失うと 病気になると 書かれていた

その瞬間私は雷に打たれたようにすべてを理解した

雑音がうるさかった
せめて吹けない口笛を吹こうとした
でもやっぱり鳴らなくて
それさえも名前のせいにした
ずっと立っていたんだ
すべてを失くしてしまった人のように
誰かとぶつかったけど
何も感じなかった

私は孤独で 散財し 病気になっていった
字画数どおりの人生をとぼとぼ歩き始めた
自分が幸せになれないのを
すべてを棚にあげて
誰とも手を繋げないのを
名前のせいにして
両親は私に不幸になってほしかったんだ・・・

大人になって何年か経ち
雑音がうるさくてたまらなかった
吹けない口笛を
吹いているふりをした
胸が痛いほど鳴らなかった

ある日知り合った外国人と少しだけ会話をした
名前を訊かれたのでなんとなく答えた
その人は その人は その人は
「なんて美しい名前なの！」って 言ったんだ

なんて 美しい 名前なの！
その瞬間私は雷に打たれたようにすべてを理解した

ああ 私の両親は
怪しい占いじゃなくて
美しい名前だと思ったから 私にそう名付けたんだ
ただ美しい名前だと思ったんだ
気付かなかったバカな私は
すべてを棚にあげて
字画数のせいにしていた

背筋をまっすぐ伸ばして早足で
雑音の中を歩いた
私は美しい名前だから
何も怖くない
口笛はまだ吹けない
でももう怖くないんだ
胸も痛くないんだ
だって私の名前は
両親からもらった 世界一美しい名前なのだから

遠雷と口笛

<http://p.booklog.jp/book/106878>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106878>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106878>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ